

# 国語科授業案

## 教科で育みたい人間像 「豊かな言語感覚をもつ人」

授業者 井上 由貴

- 1 日時 令和6年11月1日(金) 第1時 10:20~11:10  
 2 学級 3年C組 (3年C組教室)  
 3 題材名 17音に思いをのせよう

### 4 本題材で願う学び

俳句を鑑賞し、一語の重みを実感することを通して、17音で表現する意味や魅力について考えている。さらに、俳句の原案を推敲・添削する過程で級友と語り合う活動を通して、言葉を吟味し、言葉であらわされる世界の広さやおもしろさを感じている。

(学習指導要領との関連：〔知識及び技能〕(1)ウ〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと (1)ウ)

### 5 これまでの学び

子どもたちと共に学ぶ中で、以下のような学びを見とることができた。

#### (1) 読みを深めるための感覚を養う

子どもたちは、一年生の頃から追求テーマをもとに、本文中に出てくる言葉に注目しながら題材を読みこんでいる。

谷川俊太郎『未来』『未来へ』(3年時)は、「未来」という共通の語が登場するため、二つの詩を比較しながら読む必要がある題材である。子どもたちは「未来とは何か」という問いをもち、詩の中にあらわされている表現を細かく読みとりながら、「未来」という言葉がもつイメージを膨らめたり、意味について考えたりしていた。以下は、題材を終えた子どもものふり返りである。

- ・意見を共有した時に「未来が過去を決める」というとらえ方に出会って読みが深まった。「未来・過去」を「結果・過程」という言葉に置換すればいいということや、常に移り変わっていく現在が未来と過去の境界線になっていることがわかった。
- ・作品の中の意味が明確でない表現(比喻など)を自分の言葉で定義したときに読みが深まった。「未来」というのは、歴史へと変化していく前段階のことをさしているとわかった。「未来へ」では生死についての描写が多いので、「死」も歴史を作り出す要因となっていると考えられる。誰も自分自身の死を見つめながら生きているということであらわしていると思った。

子どもたちは「未来」という言葉を切り口に、それが作品の中でどのような意味や役割を担っているのかを考えることができていた。題材を通して、子どもたちは、言葉の理解を広げ、作品の中で言葉

にどのような意味づけがされているかに目を向けて、作品を読み味わう力を身につけてきている。

また、井上ひさし『握手』(3年時)では、共に手に関する言葉である「握手」と「指言葉」について注目して本文を読みこんだ。登場回数是指言葉の方が上回るが、題名に握手が採用されていることに疑問をもち、作中の表現を細かく見ていくことで、二つの言葉のもつ意味や象徴するものについても議論する姿が見られた。以下は、題材を終えた子どもものふり返りである。

- ・「指言葉」というのは、ある一定の意味に収束してしまう。本文中にも複数出てきていて、指言葉の使用者の伝えたいことというのは、ほとんど固定されている。なぜなら、指言葉には意味が定義されているからだ。しかし、握手はそれとは相反するものである。握手は握手でもどのような意味なのか。どのような想いが込められているのかは定まっていない。握手をする当事者の思いによって意味は変化する。一定の意味で定義されるような「ただの単語」よりも、「登場人物の感情が極限まで反映される言葉」が題名の役を任命されるべきものだと思う。

「握手」という言葉は日常でもよく見かける身近な言葉だが、物語の中では登場人物との関係性もあいまって、象徴的な意味をもつことを子どもたちは見いだしていた。このように、題材を重ねる中で言葉にこだわるからこそ、本文のどこに注目すれば読みを深められるのかという視点、つまり読みの嗅覚を磨いてきている。

#### (2) 自分の読みや考えを表現する力

子どもたちは、題材を読む際に、個人追求として疑問や気づき、考えを自由にまとめる活動を重ねて

きている。頭の中の考えを、文章や図を駆使しながらアウトプットし、個人で追求した事柄を全体で共有する時間をつくることで、他者や題材とかかわり合いながら読みを深めている。そうすることで、子どもたちは本文を根拠に、新たな発見や解釈のずれを楽しみながら自分の読みを表現する力を高めている。

「『言葉』を見つめる-『見ること』と『言葉』の関係性を考えること、映画の音声ガイド制作を通して-」（2年時）では、目の不自由な方を対象にした、映画の音声ガイドをつくる学習を行った。子どもたちは、膨大な情報の中から何を言葉として伝えるべきかを考え、言葉を吟味し、限られた枠の中で表現するという経験をしてきている。その中で、自分の価値観や他の人の価値観、そして目の不自由な方の価値観を擦り合わせ、細やかな表現の違いや、何を大事にして言葉を選ぶべきかの語り合いを行った。短い言葉で表現せざるを得ないからこそ、より言葉を吟味し、どのように表現すべきか試行錯誤しながら、言葉に真剣に向き合う姿が随所に見られた。このように、子どもたちは、文章を読みこむ時だけでなく、自分の思いや考えを表出するために表現する際にも、言葉を吟味し、言語感覚を磨いてきている。

## 6 題材観

### (1) 本題材の価値

#### ① 俳句と他の表現方法との違い

自分の気持ちや思いを表現したいと思ったとき、その表現方法には、さまざまな選択肢がある。現代であれば X (旧 Twitter) やインスタグラムなど、写真に短い言葉を添えて、その時の感動や周りに共有したい事柄をアップするのが主流だろう。もしくは、動画として映像作品で表現したり、作文や手紙などの文章で表現したりするなど、私たちは伝えたい内容や伝える相手によって、表現方法を使い分けている。

その中で俳句という表現方法は、子どもたちの中ではなじみがうすい部類に入る。存在は知っていても、自分から作りたいと前のめりになる子どもはあまりいない。「短い音数であらわすのが難しい」「季語がよくわからない」というように、俳句そのものが難しいと感じる子どもが一定数存在するのが一つの要因だろう。しかし、一番の原因は、あえて俳句で表現することのよさや魅力がよくわからないと感じている子どもが多いということだと考えられる。五・七・五の枠に言葉を入れ込むことは、確かに表現に縛りが設けられているため、難しさがある。だが、言葉を単に入れ込むだけならば、案外簡単にできてしまう。音数をひたすら数えて、まるでクイズのように言葉を当てはめるだけなら、俳句で

あらわす必要性を感じない。これでは子どもたちの中の「どうしてわざわざ俳句で表現する必要があるのか」という疑問は解消されず、積極的な創作活動にはつながりにくいだろう。

では、他の表現方法と俳句の何が異なるのか。それは、伝えたいことに対してこだわり抜くことだと考える。俳句は表現したいことや情景の一部分を切り取り、17音という短い音数であらわす。そうすると、表現したい事柄について細かく観察したり、その時の状況を詳しく思い出したりする必要がある。自分は何を伝えたいのかを明確にしなければ、選ぶ言葉もぼんやりとしてしまい、頭の中のイメージ通りに表現することはかなわない。短い時間でより多くの情報を得ることが是とされがちな現代では、写真や映像の方が好まれるだろう。だが、あえてその逆をいく俳句では、伝えたい事柄を時間をかけて吟味することで、自分が表現したいことの焦点が定まる。たった17音しかないからこそ、言葉を少し工夫するだけでその効果が如実に表れるのが俳句である。俳句の世界にふれることで、身近な表現方法との差異を感じながら、言葉にこだわり、表現の深さを身近に体感できることが俳句の魅力である。

#### ② 一音で世界観が変わる

俳句では、同じ情景を詠んだものでも、言葉選びや言葉の順序が少し異なるだけで、表現できる世界の幅は大きく異なってくる。与謝蕪村の「五月雨や大河を前に家二軒」では、助詞を一音変えるだけで、俳句のスケールが大きく変化する。例えば、「五月雨や大河の前に家二軒」というように「大河を」を「大河の」に変えてしまうと、単に家二軒が大河の前に建っているだけになってしまう。助詞の「を」はたった一字であるが、俳句において大きな役割を担っていることが感じられるだろう。このように、一音の重みを実感するのに俳句は最適な題材である。

また、テレビ番組「プレバト」で紹介されたアンミカさんの「盆の月ラーメンの香に父偲ぶ」は、言葉の順序の工夫によって俳句の世界の広がりを感じられるよい例である。この俳句からは、お盆に月を見ながらラーメンを食べ、父との思い出に浸っている情景が浮かんでくる。読み手にも内容や思いが通じるよい句のように思えるが、番組の中では「盆の月かのラーメンの香よ父よ」と添削が行われた。詠まれた情景は変わらないはずなのに、添削後の方がラーメンの香りと共に父を偲ぶ心が熱く表現されているように感じられる。このように、添削前の作品と添削後の作品の変化が初心者にもありありと感じられるところが、俳句のおもしろさだと考える。

### ③余白（遊び）がある

俳句は17音という音数の縛りがあるため、全てを事細かに説明することはできない。だからこそ、少ない言葉に思いをのせて表現し、あとの余白の部分は読み手の想像に委ねる。だが、作品は読み手に全てを委ねるものでもなく、作者の表現したいことや思いが土台となって作られているものだ。作者の用意した世界の中で読み手は自由に遊ぶという仕組みである。読み手に正しく遊んでもらうためには、自分のあらかわしたい世界が読み手の頭の中に想起されることが必要になる。すぐに自分の思い描く世界が言葉として表現できればいいが、実際には難しく、試行錯誤することになるだろう。だが、言葉を吟味し洗練された表現を追求していくことで、17音という制限の中で、読み手が遊べる余白は広がっていく。さらにいえば、17音しかないからこそ、読み手は自身に重ね合わせたり想像したりして共感し、俳句の世界を味わうことができる。すべてが視覚でわかってしまう写真や映像ではできない楽しみ方であろう。物事を正確に伝えることが得意である表現方法との差はここに凝縮されており、俳句ならではの魅力である。

### ④五感で楽しむことができる

俳句は、言葉を使って表現するが、書かれている事柄以外のものすらもあらわすことができる。音はしないのに音が聞こえたり、匂いはしないのに、なぜだか感じられたりするなど、言葉によって五感に訴えかけてくるところも俳句の魅力であろう。高野素十の「ひつぱれる糸まつすぐや甲虫」であれば、夏休みにカブトムシを捕まえたことのある人であれば、カブトムシの力強さが思い出され、糸を引っ張ってギチギチと歩く音や、昆虫特有の香りまで想起されることだろう。読み手は自分の経験と俳句であらわされている世界とを無意識につなぎながら、音や光、匂いなどを感じるのである。さらには、五感で俳句を楽しむうちに、書かれていない書き手の感動が伝わってくることもある。より多くの俳句と出会うことで、自分が共感できる作品と巡り会い、鑑賞する楽しさを感じることができるだろう。

また、俳句には音の響きの美しさがある。書かれた俳句をただ黙読するのでは、俳句の魅力を真に感じることはできない。声に出して読んでみることで、さらに俳句の世界の豊かさを知ることができる。前述の「盆の月かのラーメンの香よ父よ」の句では、「かの」の「か」と「香よ」の「か」が響き合っリズムが生まれ、声に出して読むと響きの美しさを感じられる。また、加藤楸邨の「たんぽぼのぼぼと綿毛の立ちにけり」であれば、「ぼぼ」という表現が文字の見た目においても、声に出した音の面でも、たんぽぼの綿毛のふわふわとした可愛らしさを演

出している。このように、俳句では視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚といった五感を使って、表現された世界を楽しむことができる。

### (2) 本題材で願う子どもの姿

本題材では、17音という少ない音数で表現するために、言葉と向き合い、吟味することを通して、他の表現方法ではあらわすことのできない俳句の魅力に気づき、俳句の世界を味わう姿を期待したい。

子どもたちにとっての俳句は、身近にあるがどこか遠いものであり、短時間でたくさんの情報を読みとれる他の媒体と比べると、不便さを感じるものもある。なぜ不便さを感じるかという点、詠むのにも読むのにも時間がかかるからである。SNSやAIが普及しつつあり、一瞬でやりとりや表現ができてしまう現代において、あえて一度立ち止まって表現にこだわり、言葉のみつめ、一音に込められた思いに心を傾ける、そのようなゆっくりとした時間もいいものだ、と感じられるような人になってほしい。

授業の中では、松尾芭蕉の俳句を鑑賞し、推敲の過程を知ること、俳聖である芭蕉であっても俳句で表現することの難しさを感じていたという驚きと、推敲をすることの大切さを子どもたちは感じるはずである。実際に言葉が洗練され磨かれていくさまを鑑賞することで、17音に絞って表現すること、読み手に与えられた余白が広がることや、言葉のもつ意味や俳句の世界の広がりを感じてほしい。他の題材でも言葉にこだわって読んできた子どもたちだからこそ、17音の中の一音の重さがどれほどのものかを感じることができると考える。また、鑑賞することで得た視点を生かしながら作り手として俳句を推敲する活動を行うことで、言葉にこだわり、表現することの難しさや楽しさ、人に伝えたいことが伝わる喜びを感じると共に、言葉のもつ力を実感するだろう。

これらの活動を通して、俳句がもつ可能性、俳句だからできる表現の深さや魅力に気づき、言葉を大切にできる言語感覚の豊かな人になってほしい。

## 5 7 題材構想 (全9時間)

- |  |
|--|
| (1) 俳句の世界にふれてみよう (2時間)<br>(2) 俳句の魅力を考える—『おくのほそ道』立石寺を読む— (2時間)<br>(3) 俳句を推敲しよう (3時間：本時はその2)<br>(4) 俳句の魅力についてまとめよう (2時間) |
|--|

「俳句」そのものは身近で、今までに一度は作ったことのある子どもがほとんどだろう。季語を使い、五・七・五の枠に整えればよいということは浸透しているが、音数を揃えることに意識が向きすぎるがあまり、形にすることが目的になりやすい。また、五・七・五や季語という縛りはあるものの、音数さえ合わせれば形はできてしまうため、なんとなく言葉を組み合わせることで完成したと満足してしまう子どもがいることも事実である。本題材では、俳句の型に言葉を当てはめるだけでなく、言葉にこだわって俳句を推敲することで、言葉であらわせる世界に幅が生まれ、味わい深いものになることを実感してほしい。言葉の世界と向き合うことで、自分の中の表現の幅が広がり、言語感覚が豊かになることを期待している。

## (1) 俳句の世界にふれてみよう (2時間)

子どもたちに自分の思いや感動を表現する方法を問えば、SNSが真っ先に挙がるだろう。文字や画像、映像を使って手軽に表現する方法と、俳句とを比較すると、子どもたちは「俳句はハードルが高いものだ」「俳句は難しいものだ」という印象をもつだろう。中には「俳句でわざわざ表現する必要があるのだろうか」という思いをもつ子どももいるだろう。授業者は、言葉の吟味を通して俳句の魅力を感じるために、子どもたちに「俳句であらわす意味」を常に問いかけたい。

俳句が現代に残っているということや、親しんでいる人も多く存在していることを取りあげ、さらには、外国にもその価値が浸透しつつあるという視点をもって俳句について考えると、「俳句のよさがわからない」と感じている子どもたちは、大きなギャップを感じるだろう。「俳句についてよく知らないから魅力があるのかわからない」、「そもそも魅力があるのか自体がわからない」という子どもたちの意見や思いをもとに、「俳句にはどんな魅力があるのだろうか」を追求テーマとし、さまざまな俳句と出会う中で、言葉や表現を吟味することの楽しさや俳句における言葉選びの重要性を実感してほしい。

そこで、俳句の魅力を探っていくために、子どもたちにとっても身近な番組である「プレバト」から俳句の例を挙げる。子どもたちも実際のお題で俳句を自由に詠み、俳句をつくる楽しさと、17音の中でどのように言葉をあらわすかで表現できる世界が

大きく変わることを実感してほしい。

第二時では、「米洗う前を蛍が二つ三つ」の俳句の鑑賞を行い、どのような情景が頭に浮かんだかを共有する活動を行う。鑑賞する作品は上記のもの「前を」の部分で「前に」「前へ」「前で」に変更した作品の計四句を準備し、4グループで鑑賞を行い、それぞれの読みの違いを実感し、助詞のもつ力についても考えたい。一字へのこだわりは、作り手がどんなようすを俳句で詠みたいのかの具体的なイメージがなければ吟味ができない。より鋭く場面を切り取り、どんな思いをのせて俳句を詠むかを考えられるようにしたい。また、俳句に出てくる表現を味わうことで、写真や映像とは異なる俳句の表現の楽しさを感じると共に、言葉のもつ力にも気づいてほしい。

## (2) 俳句の魅力を考える

## —『おくのほそ道』立石寺を読む— (2時間)

前時では、「俳句にはどんな魅力があるのだろうか」という追求テーマのもと、助詞の効果について考えた。今回は、表現にこだわって17音があらわす内容の深さや、俳句の世界の広がりやまで目を向けてほしいという願いのもと、松尾芭蕉の句を取りあげる。俳聖とも呼ばれる芭蕉は『おくのほそ道』の「立石寺」で、「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」という俳句を詠んでいる。この句ができあがるまでには、「山寺や石にしみつく蟬の声」「淋しさや岩にしみこむ蟬の声」という初案や再案が存在している。これらの句を比較すると、子どもたちは「山寺、淋しさ、閑かさだと、俳句で表せるスケールが異なってくる」「芭蕉でさえ、言葉を選ぶのに試行錯誤しているのか」という気づきや感想をもつだろう。俳句を推敲して表現を変えることで、どのように読み手の頭の中で俳句の世界が広がるかを語り合うことで、俳句で表現することの楽しさや言葉にこだわることの意味について子どもたちは深く考えるだろう。今まで他の題材で言葉にこだわって読む活動を重ねてきた子どもたちだからこそ、芭蕉の俳句で使う言葉の一語一語にかける思いを知ることによって、俳句にあらわされた言葉が選び抜かれたものであるということを実感してほしい。

## (3) 俳句を推敲しよう (3時間)

前時までには俳句の鑑賞を行い、言葉一つで俳句の世界が大きく変わることを知った子どもたちには、

自分たちでも表現したい、俳句に挑戦してみたいという思いが生まれるはずである。そこで、今度は作り手としての立場を体験すべく、俳句を詠む活動を行う。お題は「体育祭」とし、子どもたち全員が共通してイメージしやすいものとする。体育祭で撮った写真を何枚か用意し、グループで一枚選択して同じ写真についての俳句を詠む。その際に、一から作ることは抵抗を覚える子どももいるだろう。しかし、俳句の原案があり、その作品に対して「〇〇は説明的で面白くない」「私だったら〇〇と表現する」と添削を行う活動であれば、子どもたちの抵抗感も和らぐと考えられる。故に、今回はAIの力を借りて俳句の原案を示すという方法を提案する。授業者は、子どもたちの俳句づくりに対する姿勢や意欲をみとり、個人で作成した俳句を添削作品として準備するか、AIで作成したものを原案とするか子どもが選択できるよう働きかけたい。AIを原案とする場合は、写真データから得られる特徴を単語という形であらわし、AIに読みこませ、機械的に俳句を作成し、それを添削するという形で作品づくりを行う。子どもたちは、AI俳句に興味をもつことが予想されるため、以下は、AI作品を原案とした流れの一例を示す。

例えば、「体育祭 リレー 競い合う」をAIにより読みこませると「競い合うバトンつなげる秋の空」という結果が一瞬で表示される。このように、急速に発展をしているAIにも俳句をつくることはできる。しかし、子どもたちには「AI俳句でいい」と満足してほしくはない。AIには作り出せない、実際に体験した自分たちにしかあらわせない熱量や、その場の空気感、緊迫感などを俳句に盛り込むために、あえて「添削する」という形で俳句をつくる活動を設定する。自分や他者という人が作った作品に対して大きく添削を行うのに気後れしてしまう子どもも、AIが作った作品であれば、遠慮なく自分の思いや言葉のこだわりをもとに添削が行えるだろう。

また、より言葉を吟味するために、AI俳句の五・七・五の上句、中句、下句のどれかは採用するというルールを設ける。原案があることで、俳句に苦手意識がある子どもも「私だったら〇〇というように表現するだろう」というように作品づくりに参加しやすく、表現することに前向きに取り組んでいる子どもは、よりこだわって自分の思いや伝えたいことをあらわそうと試行錯誤すると考えられる。AI俳句に出会った子どもたちは、以下のような添削をしていくだろう。

・「競い合うバトンつなげる秋の空」の句の「秋の空」を固定して添削してみよう。バトンという言葉でリレーをしているのは読み手に伝わる。それならば、競い合っているのはいなくても伝

わるだろう。私はバトンゾーンでバトンを受け取ったあとに、バトンを右手から左手にもち替えるときのグンッと前に蹴り出す感じを表現したい。それなら「もち替えてバトン踏み出す秋の空」がいいだろうか。これだとバトンが踏み出すというように読めてしまって、意味がわからない感じがする。「もち替えて踏み出すバトン秋の空」の方が伝えたい内容が表現できているだろう。他の人にどんな風に伝わるか聞いてみたい。他の人はどのような所に注目して俳句を添削したのだろう。

など

作品の添削を終えた子どもは、どのような思いで添削をしたのか、言葉にどのようにこだわったのかを他者も理解しやすいように、自分が作った俳句に対しての説明文を作成する。説明文には季語、俳句の大まかな意味、写真のどこに注目して切り取ったか、どんな思いを込めたか、添削をした視点(どのような狙いで書き換えたり言葉を入れ替えたりしたのか)について記述する。自分で自分の作品を説明することで、俳句にどのように向き合い、言葉にどのような思いを込め、どこにこだわったのかを自覚しやすくなると考える。「もち替えて踏み出すバトン秋の空」の俳句について説明をすると以下のようなものになるだろう。

・私があらわしたのは、体育祭のリレーのバトンパスの場面で、バトンを受け取った人が、バトンをもち替えて、力強く秋の空に向かって走り出すという情景です。季語は「秋の空」です。私は、バトンという言葉に注目して、この言葉だけで体育祭のリレーで盛り上がっているようすが伝わると思ったので、競い合うという言葉は必要ないと判断しました。私はリレーの中でもバトンパスの場面が一番ドラマチックで盛り上がると思います。だから、走者から次の走者へバトンが渡り、新たなスタートする部分を切り取りました。バトンは受け渡しが無音になるよう、右手で受け取って左手にもち替えます。もち替えた瞬間にリレーの走者は交代し、最初の一步に熱い思いを込めて力強く踏み出します。そのようすを踏み出すバトンという表現に込めました。また、最後に秋の空という季語が入ることで、走り出した走者の視線が地面から空へと向かい、清々しいスタートを切れたことをあらわしました。最初は「もち替えてバトン踏み出す」と表現していましたが、これだとバトンが擬人法のようにも読めてしまい意味が伝わりづらいと思ったので、「踏み出すバトン」にしました。

など

作品と説明文が完成したら、同じ写真について俳句の添削を行ったグループで匿名の鑑賞会を行う。子どもたちは作品の説明文と添削後の作品を見て、自由に語り合う。語り合う内容は、よい点はもちろん、改善点も話し合えるとよい。語り合う内容としては、読み手に伝わる表現であったかや、作者の思いが十分に表現できているかなど、今までの俳句の学習でふれてきた視点で話し合う姿を期待する。添削を実際に行ってみて、自分では至高の表現だと思っても、共有の場面で他の人の作品に出会うと、新たな表現方法に驚かされるということも少なくない。同じ感動を詠んでも、どの角度から表現するかによって、作品は大きく変化する。自分が作った俳句で何を伝えたかったのか、また、読み手にはどのように伝わったのかを知ることで、より表現を吟味し、俳句のもつ余白で遊ぶ楽しみも味わうだろう。語り合いの後は必要があれば作品の修正を行い、全体で添削を行い語り合った感想の共有を行う。

- ・「秋の空」という季語を固定にしたから、作者がこの季語をどのようにとらえているかの差が出たと思う。
- ・季語は単なる季節をあらわすだけの言葉としてあまり重要視していなかったけれど、〇〇さんの地面に向いていた視線を秋の空に向けることで、スタートを切った走者の清々しさをあらわすというとらえに納得した。
- ・爽やかな感じがする。一番でバトンをもらって気持ちよくスタートしたみたいだ。
- ・空は快晴、競技をしている人も気もちが高まっている感じが伝わる。
- ・「もち替えて」と「踏み出す」で手と足の動きの両方が想像できる。

など

で、作った人がどんなところに注目して作ったのかがわかり、その人の価値観が俳句で詠むところの切り取り方に出ていると思った。読み手に想像してもらおう部分を残すからこそ、表現する言葉にはこだわって作ることができたと思う。17音しか言葉にできないからこそ、作り手は言葉選びや表現にこだわるし、選ばれた言葉で構成された俳句には、文章や写真ではあらわせない、言葉の世界が広がっていると感じられた。今までは自分の思いや考えが正しく伝わるように細かく説明的に書くことが多かったけれど、あえて書くことを絞って、表現することのおもしろさを知ることができた。

など

このように、本題材を通して、言葉の力に改めて気づき、日常でもほんの少し言葉を吟味することを気にかけるだけで、言葉の世界はより豊かなものになっていくことを子どもたちは実感するだろう。言葉は身近にあふれており、歩み寄ればすぐに浸ることができる。言葉の世界の豊かさを感じながら言語感覚を磨き、自分の視野を広げて、豊かな人生を歩んでいくことを願っている。

#### (4) 俳句の魅力についてまとめよう（2時間）

前時までの俳句を鑑賞する、自分で詠む、添削するという活動を通して、「俳句にはどんな魅力があるのだろうか」について自分が見いだしたことをまとめる。

- ・今回の授業で俳句について学んでみて、言葉であらわすことのおもしろさを知った。最初は写真や動画の方が手軽に伝えられるからいいと思っていた。でも、俳句を作ったり鑑賞したりすると、映像や写真といった表現には情報がたくさんありすぎるせいで、本当に伝えたいことが伝わりにくくなる可能性があることに気づけた。俳句を読んで添削という形で創作するのは難しかった。でも、同じテーマで作った俳句を比べること

- 5 参考文献：高橋真紀子(2007) 『俳句のツボ』 平凡社  
辻桃子(2000) 『作ってみようらくらく俳句』 偕成社  
夏井いつき(2014) 『超辛口先生の赤ペン俳句教室』 朝日出版  
夏井いつき(2016) 『超カンタン! 俳句塾』 世界文化社  
藤井 罔彦(1998) 『俳句を読もう-芭蕉から現代までの二六八句-』 さ・え・ら書房
- 10 文部科学省(2017) 『学習指導要領解説 国語編』
- 参考資料：“プレバト” プレバトホームページ <https://www.mbs.jp/p-battle/>  
“夏井いつき俳句チャンネル” [https://www.youtube.com/channel/UC1qAL6Zv3V\\_EGodLr\\_uuvjw](https://www.youtube.com/channel/UC1qAL6Zv3V_EGodLr_uuvjw)